

のなか たかひろ
野中 孝泰

●電機連合・書記長

労働運動に共感を 政治に信頼を

はじめに

新年明けましておめでとうございます。皆さま其々に新しい年を力強くスタートされたこととお慶び申し上げます。

ある記事を読んだ事がきっかけで、ここ数年続けていることがある。12/29は「一年間を反省する日」、12/30は「一年間頂いた恵みを思い起こす日」、12/31は「新しい年を如何に過ごすかという決意を固める日」と決めて、一年を振り返り、新年に備えることである。

新しい年を迎え、また新たな立場で、この一年どのような思いで労働運動に取り組むか？ その一端を申し上げさせて頂きたい。

100年後の世の中

少し古いが、未来予測研究会が2007年10月に、100年後の未来技術や社会を20項目にわたり予測した本を出版している。その一部を紹介させて頂くと「地球の人口は110億人に」、「先進国の平均寿命は100歳超」、「冷凍人間技術の開発」、「地球温暖化現象の継続」、「気候変動や自然災害が予測可能に」、「海洋都市の建設」、「火星移住」、「核融合技術によるエネルギー」、「ナノテクによる新材料開発」、「遺伝子診断に基づくテーラメイド医療・教育」、「癌は遺伝子レベルで予防・治療」、「量子テレポート」、「ロボットの活用」、「ロボット技術で人間の一部をサイボーグ化」、「バイオテクノロジーにより安全・美味・高生産性の食糧調達」などが予測されていた。

夢のように感じるものもあるが、2100年頃には、この中の幾つかは実現しているだろう。そして人間が考え出す技術の可能性に改めて期待したいと思う。

同時に夢の現実に向かって「無限の可能性

を秘めた人の力をいかに引き出すのか？」を大事にした労働運動を進めて参りたい。

日本の国のかたち

ご存知の通り日本は人口減少・少子超高齢社会を迎えている。これまで右肩上がりの中で構築されてきた制度や仕組みを作り直さないといけない現状なのに、そのことが先の総選挙で争点に挙げられていないことは大変残念だと思っている。

・社会保障の給付と負担の現状

2012年度の給付総額は約109兆円（年金54兆円、医療35兆円、福祉その他20兆円）であり、その財源は保険料61兆円、公費（税金）42兆円、およびその他収入（資産収入等）で賄われている。

そして、2000年の給付総額が約78兆円であったことからすると、この10数年ほどで約30兆円も給付が増加したことになる。

厚生労働省の試算では、2025年には給付総額が約150兆円に増加する見込みとなっている。

わたしたちが安心して暮らせる社会の実現のためには社会保障はなくてはならないものであり、その再構築は大きな課題だと思う。

・生産年齢人口の減少と非正規労働者の増加

2012年から2013年にかけての人口構造の変化の実態に驚いた。15才未満の年少人口は約15万人減少し、65才以上の高齢人口は約110万人増加、そして社会を支える生産年齢人口は約116万人も減少している。生産年齢人口が毎年減少し、世界に類を見ないスピードで高齢化が進み、少子化が進んでいる。社会保障や経済を支える生産年齢人口が大幅に減少し、加えて雇用労働者の約4割が非正規労働者であり、不安定な雇用と低処遇が社会問題化している現状がある。



・先送り出来ない課題

このような現状の中で、「社会保障の給付と負担のあり方をどうするのか」ということは国民と国との共同事業と言っても過言ではないテーマだ。世代間の利害関係を乗り越えて再構築しなければならない難しい問題でもある。加えて人口減少・少子高齢化問題、経済や財政の問題、非正規労働者の問題などすべてが関わりあっている。多くの国民が将来に不安を持っており、まさに将来の「日本の国のかたちをどうするのか？」先送り出来ない極めて重要な課題であると思う。であるのに「何故、全体像が国民に示されないのか？」、「何故、国民的議論にしていけないのか？」。このことは政権を担うものの責任ではないのだろうか？。

十を三で割る心

利害関係を乗り越えて社会保障を再構築するためには、一人一人の心の中にある助け合いの精神、絆を大切にすることが重要だと思ふ。制度や仕組みは当然大事だが、それを支える精神文化が重要だと感じている。ある本に興味深い内容が記載されていたので紹介させて頂く。

「十割る三は永久に割れませんが、人間の感情も割り切れないということは歴史が証明しています。それを割り切ろうとするところに、色んな問題が出てくると思うのです。十を三で割れば一余ります。人はえてしてこの一が自分にプラスになれば自分のものとし、マイナスになるものであれば他人に押し付けがちです。これでは社会に争いが絶えません。この割り切れない一を、相手にプラスになるものであれば相手にあげればいい。まず、自らが謙虚になり、しかも卑屈にならず、“十を三で割る心”で割り切れない感情を処理し

て行きたいものだ。」(『時に應じて』より抜粋)

社会保障の再構築にあたり色々な利害関係の対立を、上手に乗り越えていく先人の知恵のように感じた。

労働組合の社会的責任

昨年末に行われた第47回衆議院議員選挙の投票率は戦後最低の52%台であった。

そしてその選挙の結果、与党が326議席を占めた。このことは参議院で否決された法案を再可決できる2/3超の議席を獲得したということだ。選挙に行かなかった人の意向も含め、本当に民意を反映した国の運営になるのか？。このことに危機意識を持っている方々も多いだろう。上記で述べた「社会保障の給付と負担のあり方」を含め、日本の将来を決める岐路に立っていると思う。政治のバランスが崩れた状態で、偏った方向に日本が向かっていくのではないかという不安も感じる。

今こそ働く者の代表である労働組合の存在意義を発揮しなければならない時と思う。戦後日本の労働運動の歴史は「抵抗の時代」に始まり、「要求の時代」を経て今日、「参加・参画が求められる時代」になったと言われているが、まさに政治に対しても働くものの代表としての参加・参画と、社会的責任を果たしていきたい。

結び

労働運動の社会性は益々高まると思うし、高めなければならない。その為にはこれまで以上に政治に対する組合員の意識、働く者の実態や声をしっかり把握する必要がある。そして一方では、政治に関わることの重要性や労働組合と政党との関わりについて、組合員と話し合っ参りたいと思う。